

あなたと博物館

松本市立博物館ニュース No.162 2009.5.1

Folk & Craft

特別展

松本・民芸・丸山太郎

会場 松本市立博物館 2階特別展示室

会期 平成21年4月25日(土)～5月31日(日)

常設展観覧料：大人200円(180円)／小人100円(90円)
※()内は20名以上の団体料金

特別展

丸山太郎の仕事

会場 松本民芸館

会期 平成21年4月25日(土)～6月7日(日)

観覧料：大人300円(団体20名以上200円)
小・中学生、70歳以上の松本市民 無料
休館日：5月4日を除く毎週月曜日と5月7日

主催：松本市立博物館 松本民芸館
共催：長野県民芸協会



丸山
太
郎
生誕
100年記念

沖縄ガラス

もくじ

誌上博物館◇私の民芸入門	2-3
「生誕100年 丸山太郎の仕事展」によせて	4-5
信州大学創立60周年記念「よみがえる名画」展によせて	6-7
ひとの動き	8
ガイドコーナーはんてんぼく	8

私の民芸入門

～丸山太郎生誕100年記念特別展「松本・民芸・丸山太郎」によせて～

はじめに

「民芸」という言葉を聞いて皆さんはどうなことを思い浮かべますか。日本各地に数あるお土産屋の店頭に並ぶ竹細工・木工品・陶器など地方の特産品でしょうか。または、民芸風食事処や民芸風旅館を思い描くかもしれません。いずれにせよ、伝統的ではあるけれど高価なもの、どこか懐かしい日本っぽいものをイメージとして抱くのではないでしょうか。恥ずかしながら、民芸初心者の私は、今回の特別展に携わるまで「民芸」に対し、そのようなイメージしかありませんでした。このようなイメージも間違いではないようです。しかし、特別展の準備を進める中、もっと違った意味があることを知りました。

丸山太郎生誕100年に際してキーワードの一つが「民芸」です。特別展をより楽しむために、私とともに民芸入門の扉をたたいてみましょう。



松本の伝統工芸 美篠細工

1 民芸のはじまりを知る ～民芸ってなんだろう？～

「民芸」ってなんだろう？私はこの疑問を解決し、その言葉・概念を知るために、まず「民芸」のはじまりを知ることにしました。「民芸」の誕生について知ることが、理解を深めるための近道に思えたのです。

伝統的・地方色・郷愁・懐古などの思いを、何となくイメージさせるため、民芸という言葉は、遥か昔から使われていた言葉のように思われがちです。しかし、この言葉が生み出されてから、わずか80年ほどしか時は経っていません。

大正時代の末期、民芸運動の父・柳宗悦・陶芸

家河井寛次郎・濱田庄司らによって「民芸」という造語が提唱されました。「民芸」とは「民衆的工芸」あるいは「民間の工芸」として、無名の職人たちが民衆の日常生活のために作ったものを指す語です。簡単にいいかえれば、日用雑器・雑貨のような使い捨ての消耗品にも美術品に負けない美しさがあり、そこに価値を付加していくことを「民芸」と呼んだともいえます。いずれにしろ、「民芸」という言葉・思想は誕生した当時においては、とても斬新で、それまでにない新しさをもったものでした。

ここで、「民芸」が誕生するまでの時代的背景・社会的背景についてふれておきます。柳宗悦らが生きた、時代・社会の流れが「民芸」を生み出す重要なファクターとなつたからです。

明治維新以後、西欧列強に追いつくために明治政府がおこなつた、急激な近代化・西洋化は江戸的なものを徹底的に排除するものでした。同時に、日本的なものや民衆的な文化への再評価を促すことになりました。このような近代化の波は、現実的な問題として、手作りの日用雑器を都市部から駆逐していきました。その結果として、雑器・雑貨類は地方に残り、そこに民芸運動が広まっていくことになります。

「民芸」を生み出ことなつた時代のダイナミックな動きの一方、民芸運動に多くの賛同者が集まつた背景には、大正期における日本の工芸界の状況が関係しています。当時の工芸家たちは、自分たちの作る作品を少しでも鑑賞の目的に特化した、現在で言うファインアートに近づけようとしていました。使うことよりも鑑賞性の高い、華美で技



生活の中で使われる雑貨 ざる・かご

巧的な装飾へ力を注いでいたのです。柳宗悦らがはじめた民芸運動は、こうした工芸界のメインストリームへの不満の表れと考えることもできます。それゆえに、貴族的なもの・鑑賞に特化したものに対して、民衆的なもの・実用性に特化したものを見重視しました。さらに、近代化とそれに伴う機械産業化が手仕事を駆逐するように発展していることへの危機感もあったことでしょう。

日本における近代化の大きな動きの中で生まれた「民芸」という言葉。それは、鑑賞に特化しそうした美術工芸と大量生産・大量消費を目指す機械産業化とは異なった、もうひとつの文化だったのです。

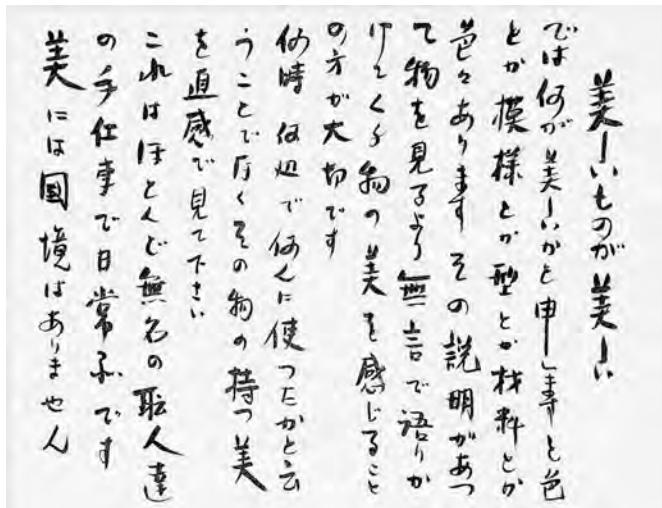
以上のように始まった民芸運動が、松本と本格的に関係をもつようになるのは、戦後の昭和20年代のことです。今年、生誕100年を迎える丸山太郎をはじめ、工芸染織家として活躍した三代澤本寿、松本民芸家具の主宰・池田三四郎、運動を行政面からバックアップした下条寛一らによって、松本は「民芸を育てたまち、民芸に育てられたまち」となっていました。

2 民芸の定義を考える ～プラスティックの食器は民芸か？～

無名の職人が作り、安くて使いやすいものが民芸であるとされます。ここで、現在の生活にこの概念を照らし合わせると、民芸初心者には素朴な疑問が生まれます。それは、「100円ショップなどで売られる量産品も民芸ではないか」ということと、「かつて民芸を牽引した人々の作品は高価なものが多い。これは民芸ではないのではないか」ということです。これは、民芸の定義についての小さな誤解から生じる疑問のようです。

まず、量産品を民芸とするかについてですが、これは、上記の定義を必要十分条件としていることに誤解があります。定義を満たすものが全て「民芸」ととらえるよりも、定義を満たすものの中に「民芸」と価値付けられるものがあるととらえる方が現在の生活にしっくりとなじみます。では、何を基準で「民芸」を選ぶかというと、明確には示されていません。柳宗悦の言葉では「直感」ですし、丸山太郎は「美しいものが美しい」と言っています。どちらにせよ、とても主観的に「眼にかなうものを選ぶのが民芸のようです。

次に、高価なものは民芸ではないのでは？ということについてです。日用雑器や日々の生活の中



松本民芸館創設者 丸山太郎筆

で使われる雑貨は、時に、「下手もの（げてもの）」と呼ばれていました。この下手ものの一部が民芸として価値付けられたのです。民芸となったその瞬間から、民衆の生活雑貨であったものは、都会の趣味人のための嗜好品になっているのです。だから、民芸は安価ではあるものの、最初から少しだけ高価な趣味的なものとして誕生しているといえます。そのため、現在でもある程度高価なものが多いのではないでしょうか。

おわりに

民芸初心者として、民芸の概念的な部分をこれまで述べてきたわけですが、民芸をよく知る方からしたら当たり前のことでアリ、的外れだと感じたりすることも多いかと思います。民芸入門者を鍛える意味でご意見等をお聞かせいただければ幸いです。

博物館で現在開催中の丸山太郎生誕100年記念特別展「松本・民芸・丸山太郎」、松本民芸館を会場に開催中の「丸山太郎の仕事」では、丸山太郎関連資料のほか、民芸の美しい作品を展示しています。理屈を抜きに、物の持つ自然の美を心行くまで堪能していただければ至上の喜びです。

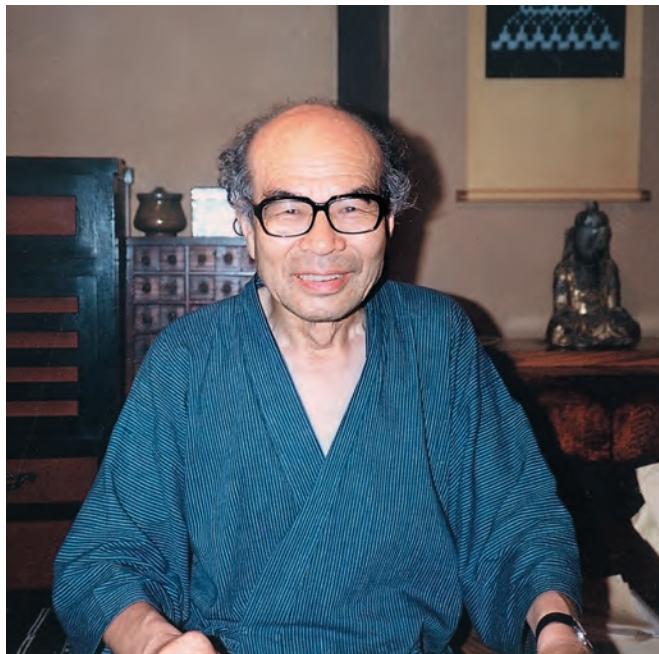
(学芸員／一ノ瀬幸治)

参考文献

- 『The あんていーく Vol.10』読売新聞社 1991年
- 『松本民芸館-美しいものが美しい』 松本市立博物館編 松本民芸館 1999年
- 『あなたと博物館』No.132 松本市立博物館 2004年
- 『民藝ルネッサンス-信州の民芸を担った人々』 松本市立博物館 2004年
- 『柳宗悦の民芸と巨匠たち展』 日本民藝館監修
- イー・エム・アイ・ネットワーク 2004年
- 『新しい教科書 11』 プチグラパブリッシング 2007年

「生誕100年 丸山太郎の仕事展」によせて

松本のまちに民芸の種を蒔き、育てた丸山太郎



松本民芸館創設者 丸山太郎氏

本年は、松本民芸館の創設者で工芸店「ちきりや」店主の故丸山太郎の生誕100年の年に当たります。松本民芸館では、4月25日から始まる「工芸の五月」とコラボレートし、丸山太郎生誕100年を記念して企画展「丸山太郎の仕事展」を開催します。同時に松本市立博物館でも特別展「松本・民芸・丸山太郎」を開催します。

丸山太郎は、小学校の同級生で染色家の三代澤本寿、市役所職員の下條寛一等（共に後に民芸協会に加わる池田三四郎、柳澤静子等と源池小学校の同級生）と準備し、昭和21年（1946）5月19日に日本民芸協会長野県支部を誕生させた民芸の「種まく人」といえます。丸山太郎を「めきき、あつめ、ならべ、かたり、ひろめ、くらし、喜び人」と称した民芸先達がいますが、丸山は民芸を生涯の喜びとし友として送りました。また、自分の住む松本のまちを心から愛し、その考えを「わたしの創造する中町」（『松本そだち』所収）として発表し、民芸に根ざした美しく豊かな松本のまちづくりを願っていました。丸山が『松本そだち』で述べた中町は、約半世紀の時を経て実現されようとしています。そして、中町は松本の中で、もっとも松本らしいまちとして訪れる人の人気を集めているのを見るにつけ、丸山の卓越した先見性を唸らずにはおれません。

さて、「生誕100年 丸山太郎の仕事展」では、プロローグとして、自身が制作した螺鈿・卵殻細工の数々や、詩情豊な版画等で、彼の作り出した

美の世界を観賞していただきます。氏の作り出した螺鈿・卵殻細工は昭和31年に日本民藝館賞を受賞した美しい工芸品ですが、今まで機会を設けて展示してきました。とても評価が高くいつも大勢のファンに展示を望まれてきました。かつて、民芸創始者柳宗悦は「（丸山さんの）卵殻貼りは日本で君一人の仕事である、誰に見せても自慢の種にしています。」「努力の賜物、近作の民芸品全体を通じ、第一列に入るもの、躊躇なく推薦できる品、大祝福です」と言葉を極めて賞賛しています。また、メキシコ貝やアワビ貝を貼ってできた螺鈿細工も神秘的でうっとりさせられます。今回もそれらの作品が展示され、企画展を見に来る人々を魅了することと期待しています。



丸山太郎作『卵殻貼茶道具箱』

また、企画展では彼の生涯が概観できる年譜やパネルも準備し、館を訪れる人に丸山太郎の足跡を振り返ってもらおうと考えています。

展示の中心は、松本民芸館収蔵の丸山太郎自身の蒐集品による約7000点の中から選んだ民芸品です。民芸とは、「民衆的工芸」からできた言葉で、「下手物の美」「用の美」とも言われ、日常生活で使われる陶器、漆器、染め・織物、木工、金工・石工、ガラス器、郷土玩具等々の中に豊かで力強い美を見出したことにはじまります。松本民芸館収蔵の民芸品は丸山太郎が生涯をかけて磨き上げた審美眼で厳しく選び抜かれた逸品ばかりです。

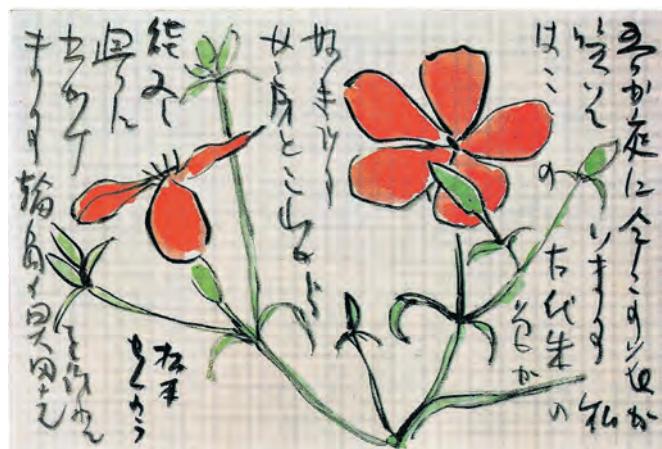
長く日本の仕事着であった刺し子は、丸山のも愛する物の一つで、とくに、青森県弘前に残るこぎん刺しや、南部地方の菱刺し、北陸の三国刺し、瀬戸内海の漁師の仕事着の「どんざ」は、愛好家

の涙さえ誘うといわれる素晴らしいものです。「今は刺し子を展示していないのですか」と多くの来館者が尋ねてくるのも故あってのことと共感を覚えます。国内外の美しいガラスには、沖縄やイランなどの個性的なガラスに混じり、可憐で涼しげな氷水やアイスクリームのカップなどの展示も楽しみです。展示でなんといっても圧巻は当館の収蔵品の多くを占める陶磁器の展示です。地元長野県の洗馬焼、入道焼、松代焼や高遠焼、そして上田の染屋焼などはもちろん、瀬戸・美濃、益子、沖縄の民芸陶器の他、九州や日本全国の陶磁器が顔をそろえます。そして、丸山が最も愛していたという、李朝の白磁大壺や水滴など松本民芸館ならではの秘蔵の展示品がご覧になれます。

丸山が、常日頃産地まで何度も足を運びコツコツと集めた、瀬戸・美濃、九州、沖縄、長野、そして李朝（朝鮮半島）をはじめ世界の陶磁器には丸山の蒐集に対する執念にも似た姿が感じられます。

他にも、観る者誰もが愛らしさにうつとりする郷土玩具の数々、力強い絵模様の筒描き、型染め、そして繊細な絹など美しい染色や織物の数々も観る人を堪能させることと思っています。

民芸館では常日頃は民芸の師柳宗悦の「先ず見よ、かくて知れ」という教えや、丸山太郎の創館の趣旨にある、展示品を知識でなく直感で感じてもらうという意味から、説明はほとんどなくキャプションも最小限のものにしています。しかし今回の企画展では、丸山太郎の書き遺した雑誌『民藝』の文章に表れた蒐集での思いや、また、蒐集した民芸品とどんな思いで向かい合ったかを、彼の遺した文章から少しでも近づけるようにと考え準備を行ないました。



『雞助集』挿絵

もう一つの展示の柱として、美の求道者として丸山が文章をよせた雑誌『民藝』や、『信州民藝』『信濃路』『川柳しなの』などに目を向けたことです。丸山太郎は、昭和30年から昭和56年にわたり雑誌『民藝』に約40篇の文を寄せました。そこには、職人・工人への励ましと応援を送る文や、民芸品とのめぐり合いの感動を取り上げたもの、旅や民芸品の产地や民芸館巡りを取り上げたものなどがあります。また、何度か行われた松本民芸館建設やそれにまつわる想いを綴っています。他にも、自身の思いをまとめて出版した『松本そだち』『雞助集』『旅の鞄』の著作もあります。これらの本は沢山の興味を持った人がおり、復刻を望む声が多く聞かれます。企画展ではこれらにも光を当てていきたいと考えています。



丸山太郎著 『松本そだち』

この企画展をとおして、松本のまちに蒔かれた民芸の種が、戦後の復興期の中、力強い奔流となって松本の物づくりや産業にも力を与え続けてきたことを伝えていきたいと思います。これらの歴史を掘り下げていけば、松本で毎年行なわれ、今年で25周年を迎える『クラフトフェアー松本』や「工芸の五月」の源流に繋がる大きなエネルギーを感じずにはおられません。それらの思いが今回の企画展の上に反映され成功をもって迎えられることができればと願うのみです。

今回の企画展は、松本市立博物館の企画のもと、丸山太郎と民芸を愛する多くの方々のご協力をいただき開催することができました。

松本を愛し、民芸を愛する多くの皆様のご来館を心からお待ち申しあげます。

(松本民芸館 館長／望月正勝)

信州大学創立60周年記念「よみがえる名画」展によせて

—松本高等学校の備品絵画の履歴—

はじめに

松本高等学校は、第八高等学校に続く9番目の官立高等学校として、新潟、松山、山口の各校とともに、大正8年4月14日に設置された地名校の第一期校です。新潟を除く3校は、講堂など当時の建物が現在も保存されています。なかでも、松本高等学校は校舎本館と講堂が、その敷地とともに当時のままに残され、重要文化財に指定されています。

松本高等学校第2代校長・大渡忠太郎の時代に購入したとされる大正時代の名画19点が、信州大学に引き継がれ現在も保存されています。今年は信州大学創立60周年にあたり、絵画を所管する信州大学附属図書館と松本市美術館が共同主催し、「よみがえる名画—旧制松本高等学校の遺産」を市美術館で開催しています。

19点そろっての公開は、昭和53年9月の松本高等学校60年記念祭の展覧会以来、約30年ぶりです。ここでは、これらの名画がこれまでどのような歴史をたどってきたのかを、信州大学附属図書館から旧制高等学校記念館に寄託されている備品台帳などの資料から振り返ってみます。

作品の購入時期

大渡校長の在任期間は、大正10年11月から昭和2年8月までの5年10ヶ月で、あがたの森にヒマラヤ杉を植樹した校長として知られています。大渡校長のもうひとつの語りつがれた事績が、備品絵画の購入です。

これらの作品は、昭和53年に「大渡校長コレクション名画展覧会」と銘打って公開されました。松本高等学校の備品台帳からひろいだしてみると、その19点すべてが大渡校長時代の購入ではないことがわかります。

備品台帳には「出納簿」「内訳簿」「支給簿」「監守簿」の4種類があり、19点の絵画はこの台帳の《額面》《西洋油絵額》《油画》という3つの項目（分類番号順）に分類されて出てきます。《額面》に分類されているのは藤岡亀三郎の「信州四谷ノ景」と高木背水の「五月雨ノ朝」の2点、《西洋油絵額》には、長原孝太郎の「花瓶ト花」、田辺至の「秋色」、石川寅治の「潮来ノ春雨」、南薰造の「雨」、岡田三郎助の「鞆ノ津」(註)、和田英作の「スイートピー」、矢崎千代二の「カルカッタ郊外ノ村落」および「印度教徒ノ沐浴」、小林万吾の「山辺」、藤島武二の「ローマノ風景」、白滝幾之助の「バラ」、中沢弘光の「海岸」、辻永の「風景」、石井柏亭の「鞆ノ津」、満谷

国四郎の「野尻湖畔晩秋ノ景」、柚木久太の「雪ノ諏訪湖ノ景」の16点、《油画》には清水良雄の「湖畔」1点が分類され、合計19点となります。この19点以外に、《額面》に後藤工志の水彩画「川口湖畔ノ春雨ノ景」、《図画》という項目に藤岡亀三郎の「石楠花」という作品名が見えます。

これらの作品の購入時期は、「備品出納簿」によると、《西洋油絵額》に分類された16点は大正11年および同13年の購入と推定されます。購入時期の特定には「支出官支出内訳簿」を用いるのが適当ですが、大正10年度および12年度の「支出内訳簿」が失われているので「出納簿」から推定するしかありません。両方の帳簿を比較できる作品では、昭和3年3月25日付で「出納簿」に記載された後藤の「川口湖畔ノ春雨ノ景」が「支出内訳簿」で昭和3年4月13日に、昭和8年2月2日付で「出納簿」に記載された高木の「五月雨ノ朝」が「支出内訳簿」で同日に支払されていることから、正式な購入時期が「出納簿」の日付と大きく異なることはないと考えます。

「出納簿」の記載を見ると、19点の作品のうち、高木の「五月雨ノ朝」をのぞく18点が、大渡校長時代に購入されていることがわかります。「出納簿」には、昭和8年3月の支給先も記され、「備品支給簿」の記載とほぼ一致しています。

作品の分類

それぞれの作品について、少し詳しく見てみます。備品台帳で《西洋油絵額》に分類された16点のうち、矢崎の「カルカッタ郊外ノ村落」および「印度教徒ノ沐浴」はパステル画、石井の「鞆ノ津」は水彩画ですが、なぜかここに分類されています。この16点の購入時期は、すべて大正11年の年度末で、2月20日、3月24日、同27日の3日に分けられて台帳に記載されていますが、いずれも同一の担当者が処理したと思われます。

次に、大正13年3月3日に購入された藤岡の「信州四谷ノ景」は、油彩画ですが《額面》に分類されています。この作品以前は、《額面》の分類には額縁しか記載されておらず、以後、昭和3年3月25日に購入された後藤の水彩画「川口湖畔ノ春雨ノ景」と昭和8年2月2日購入の高木の「五月雨ノ朝」が記載されています。また、大正15年4月25日に購入された、清水の「湖畔」ですが、これは新たに《油画》という分類を設けて記載されています。これらのうち、少し遅れて購入された清水の「湖畔」や、大渡校長の退任後に購入された高木の「五月雨ノ朝」

は、担当者が代わり《西洋油絵額》の分類に気づかなかつたためとも考えられます。分類順も《西洋油絵額》より後なので、帳簿上の分類に深い意図はないといえることもできます。

しかし、藤岡の「信州四谷ノ景」が、油彩画でありながら《額面》に分類されたのには意味があったように思われます。《図画》に分類された藤岡の「石楠花」は、大正12年6月18日の購入で、大渡校長の在任期間中です。藤岡は、画家というよりは図画教師であり、「石楠花」は教材と認識されていたのでしょうか。支給部局は「図画室」となっていますが、残念ながらこの作品は今日に伝えられていません。「信州四谷ノ景」も、《西洋油絵額》に分類された絵画と一線を画する必要があったのでしょうか。昭和3年購入の後藤の「川口湖畔ノ春雨ノ景」も、同様の意味があったのかもしれません。

作品の展示

次に、これらの作品は、松本高等学校ではどのように使われていたのでしょうか。「備品出納簿」の備考欄には、19点中15点に「8. 3.11会計課ヨリ」という記載があります。この日付の直前に購入された高木の「五月雨ノ朝」と大正15年購入の清水の「湖畔」、会計課に残った矢崎の「カルカッタ郊外ノ村落」には記載がなく、大正13年購入の柚木の「雪ノ諏訪湖ノ景」は「在庫ヨリ」と記されています。大渡校長在任中に《西洋油絵額》として購入された作品が、特に大切に管理されていたような印象を受けます。

昭和8年以降の19点の作品の支給部局は、庶務課が9点、図書課が6点、教務課が2点、会計課と生徒課が1点ずつとなっています。「備品監守簿」では、庶務課が8点、教務課が3点と若干の食い違いが見られます。「監守簿」には、台帳転記後に加筆したと思われる別の筆跡で、備え付け場所が記載されています。

次に、写真に残された作品を見てみます。昭和3年の卒業アルバムには、校長室に中沢の「海岸」と満谷の「野尻湖畔晚秋ノ景」が飾られています。また、昭和4年と同6年の同窓会評議員会の写真に和田の「スイートピー」が写っています。場所は2階の図書館閲覧室です。もう1点、北寮の寮劇の写真に、田辺の「秋色」が和田の「スイートピー」とともに写っています。昭和17年の記念祭の寮劇「ドモ又の死」の一コマです。それにしても、大家の作品が、小道具として使用されているのには驚きます。

卒業生の中村勇二さん（22回文乙）は、5歳の時



校長室を飾る備品絵画(昭和3年)



北寮の寮劇「ドモ又の死」(昭和17年)

から今も絵を描き続けているそうですが、「明治の大家の作品ばかり、どれがということではなくみなすばらしい作品で覚えています。」と話してくれました。

おわりに

こうして調べてみると、市美術館で公開されている19点の作品のうち、大渡校長の在任期間中に購入され、《西洋油絵額》に分類された16点がいわゆる大渡校長コレクションといえるのではないかでしょうか。そして、これらの絵画は、かつて白馬会に属したいわゆる新派の画家たちの作品が多く見られますが、旧派の太平洋画会に所属した画家の作品も見られることから、収集にあたって作風の偏りはなかったものと思われます。

大渡校長は、松本高等学校に赴任した翌年、大正11年度の年度末に14点、金額にして1,360円の絵画を備品として購入されています。この資金をどのようなご苦労をされ工面されたのか、今では資料がなく謎に包まれているのが残念です。

註：文中的作品名は、備品台帳に記載されている名称ですので、展示会場の作品名とは異なるものがあります。この岡田三郎助の作品は、「信濃の春」として展示されています。

(旧制高等学校記念館 学芸員／木下守)

ひとの動き

転入 よろしくお願いします。

- [事務員] 高山 直樹(本館)
- [事務員] 中澤 裕美(考古博物館)
- [館長(嘱託)] 保科 利守(馬場家住宅)
- [嘱託] 増田 里菜(本館)
- [嘱託] 百瀬 英昭(本館)
- [嘱託] 斎藤 洋子(旧制高等学校記念館)

4月1日付で、次のように職員の転入及び退職・転出等がありました。()内は所属。

課内異動 職場がかわりました。

- [主 事] 平田明日美(考古博→空穂記念館)
- [嘱託] 岩原 靖(旧開智学校→本館)
- [嘱託] 西村 奈美(民芸館→本館)
- [嘱託] 横山 亜希(本館→旧開智学校)
- [嘱託] 和田 裕也(本館→旧開智学校)
- [嘱託] 小池 史子(本館→民芸館)

転出 お世話になりました。

- [主査] 遠藤 守(空穂記念館→第3地区公民館)
- [館長(嘱託)] 塩原 正壽(馬場家住宅・退職)
- [嘱託] 坂口 正雄(本館→鉢盛中学校)
- [嘱託] 島村 敬子(旧開智学校・退職)
- [嘱託] 石井 学(旧制高等学校記念館・退職)

ガイドコーナー はんてんぼく

松本市立博物館から ☎0263-32-0133

バス見学会「善光寺街道を歩く(2)」

期 日 5月19日(火)
募 集 広報まつもと5月1日号をご覧ください。

重文旧開智学校から ☎0263-32-5725

「旧開智学校所蔵写真展」

期 間 5月1日(金)~8月31日(月)
内 容 旧開智学校所蔵の写真を展示し、開智学校が開校した頃の松本と、当時の子どもたちの様子を展示します。
会 場 旧開智学校校舎1階特別展示室
観覧料 通常観覧料(大人300円、小人150円)

時計博物館から ☎0263-36-0969

時の記念日事業

企画展「わがやのお宝時計展Ⅲ」

期 間 5月26日(火)~6月28日(日)
内 容 6月10日の時の記念日にちなみ、各家庭で所蔵している思い出の時計をエピソードとともに展示します。
会 場 時計博物館3階 企画展示室
観覧料 無料(ただし常設展は有料)
休館日 月曜日

関連事業「園児時計説明会」

日 時 6月2日~5日・9~10日
「一般時計説明会」
日 時 6月6日(土)・7日(日)
11時15分~、午後2時~

はかり資料館から ☎0263-36-1191

「工芸の五月～工芸の庭～」

期 間 5月15日(金)~16日(土)、5月21日(木)~24日(日)、5月28日(金)~31日(日)
内 容 クラフト作品の展示、ワークショップなど
会 場 はかり資料館中庭
観覧料 工芸の庭は入場無料
(ただし常設展は有料)
休館日 月曜日

松本民芸館から ☎0263-33-1569

体験講座「布ぞうりづくり講習会」

日 時 5月17日(日)午前10時~午後3時
内 容 初心者も楽しめる人気の講座です。
参加料 1,800円(材料費・入場料・指導料含)
講 師 秋山 啓子 氏(NHK松本文化センター
一布ぞうり講座講師)
定 員 25名
申込み 電話で松本民芸館へ
(定員になり次第締め切り)

旧制高等学校記念館から ☎0263-35-6226

ギャラリー企画展 「あがた美術会作品展」

会 期 6月14日(日)まで
会 場 旧制高等学校記念館ギャラリー
第73回 サロンあがたの森
期 間 5月9日(土) 午後1時30分から
内 容 [話題] 戦後の信州美術の展開
一石井柏亭と宮坂勝を中心として—
[話題提供者] 佐藤 玲子 氏
(元松本市立博物館長)
会 場 あがたの森文化会館1~5教室

旧制高等学校記念館友の会

総会記念コンサート
日 時 5月22日(金) 午後2時~3時
内 容 川窪裕子さんによるアルバの演奏会です。
会 場 あがたの森文化会館講堂

第24回信州寮歌祭

日 時 5月23日(土) 正午開会
会 場 あがたの森文化会館講堂
主 催 信州白線会

※上記、いずれも入場無料です。

重文馬場家住宅から ☎0263-85-5070

お茶席の会

日 時 第2回 5月24日(日)午前10時~正午
松風の会(表千家)
第3回 6月21日(日)午前10時~正午
おしゃれ茶道の会(裏千家)
参加料 通常観覧料
(大人個人300円、中学生以下無料)

松本押絵雛による五月人形展

期 間 5月9日(土)~6月7日(日)
内 容 月遅れの端午の節句にあわせ松本押絵雛による五月人形を展示します。
観覧料 通常観覧料

歴史の里から ☎0263-47-4515

裂き織り体験

期 日 5月28日(木)、6月11日(木)・25日(木)
毎回午前10時~正午、午後1時~3時
受講料 500円~1,000円
定 員 毎回午前10名、午後10名
申込み 開催日の3日前までに、歴史の里へ電話で

草木染め体験

期 日 6月6日(土)五倍子(ゴバイシ)染め
午前10時~11時
受講料 1,000円(染めたい布を別途用意)
定 員 10名
申込み 開催日の3日前までに、歴史の里へ電話で

窪田空穂記念館から ☎0263-48-3440

短歌講座

日時及び講師
6月7日(日) 篠 弘氏
7月5日(日) 馬場 あき子 氏
9月6日(日) 内藤 明氏
11月8日(日) 来嶋 靖生 氏
毎回午後1時50分~4時
会 場 空穂生家
受講料 各1,500円
申込み 受付中
(申込方法は窪田空穂記念館へ)

子どもの短歌教室・短歌の教え方講座

日 時 6月27日(土)
①子どもの短歌教室 午前10時10分~12時
②短歌の教え方講座 午後1時~3時
対 象 ①子どもの短歌教室 小・中学生及びその家族
②短歌の教え方講座 教職員及び希望者
講 師 小柳 素子 氏
会 場 空穂生家
定 員 30名
参 加 料 無料
申 込 み 6月16日(火)から
電話で窪田空穂記念館へ

松本まるごと博物館に兄弟が増えました!

5月2日開館! 高橋家住宅

高橋家住宅は市内に残る最も古い武家住宅です。館内には高橋家に残された資料が展示されます。

観 覧 日 ●水曜日、土曜日
観 覧 時 間 ●午前9時から午後5時
観 覧 料 ●無 料
電 話 ●0263-33-1818
住 所 ●松本市開智2-9-10

あとがき

高橋家住宅が整備を終えて開館します。高橋家は旧開智学校の北東に位置しますが、江戸のころ、一帯は下級武士の屋敷地でした。明治に入り、木下尚江や澤柳政太郎などの著名人を生んだ地域としても知られています。お天気の良い一日、江戸の昔を思いながら、そぞろ歩きを楽しむのはいかがでしょう。(K.U.)

あなたと博物館 No.162

発行年月日 / 平成21年5月1日
編集・発行 / 松本市立博物館
〒390-0873 松本市丸の内4番1号 Tel.0263-32-0133
URL : <http://www.matsu-haku.com>
e-mail : mcmuse@city.matsumoto.nagano.jp